HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	曹憲『博雅音』考 : 隋代南方字音の一様相(下) 声類・韻類について
Author(s)	大島, 正二
Citation	北海道大學文學部紀要, 34(1), 47-81
Issue Date	1985-11-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33496
Type	departmental bulletin paper
File Information	34(1)_PL47-81.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

曹憲『博雅音』考

—— 隋代南方字音の一様相(下)——
声類・韻類について

大　島　正　二

筆者は曹憲撰『博雅音』について、そこに反映する音韻体系を探るための整理と、反切用字法を探るための整理とを行ない、その内、後者に関しては本紀要32—2（昭和59年3月）所載の拙論「曹憲『博雅音』考——隋代南方字音の様相（上）——」に於て報告した。本稿は紙数等の事情によりそこでは示し得なかった前者に関する報告である。尚、上掲拙論に付載できなかった資料Ⅰ．音注総表は本紀要32—3（昭和59年9月）に見えるので併せご覧いただきたい。

本　論（承前）

2. 2　音韻体系について
2. 2. 1　声　類
2. 2. 1. 1　脣　音
2. 2. 1. 2　舌　音
2. 2. 1. 3　歯　音
2. 2. 1. 4　牙喉音
2. 2. 1. 5　声類総説
2. 2. 2　韻　類
2. 2. 2. 1　介　母
2. 2. 2. 2　Ⅰ韻類
2. 2. 2. 3　Ⅱ韻類
2. 2. 2. 4　ⅢA韻類
2. 2. 2. 5　ⅢB韻類
2. 2. 2. 6　Ⅰ・ⅢB韻類
2. 2. 2. 7　ⅢA・ⅢB韻類
2. 2. 2. 8　ⅢA・Ⅳ韻類
2. 2. 2. 9　韻類総説
3.　おわりに（補説）

2. 2　以下に於て『博雅音』に見える音注を整理し、その結果を声類・韻類毎に報告する。音注の整理に当たっては、『切韻』（以下、細部の問題を除き、『広韻』を以て代用させる）の体系(1)の上に音注例を投影して両者間の「ずれ」の有無を探る方法(2)に拠るが、本稿で提示・考察の対象とするのは、『切韻』の体系と「ずれ」を示す音注の中で、『広韻』義注と『広雅』義との関連に於て検討を加えた結果、『切韻』『博雅音』が共

に同一の語の音形をそれぞれに示していると判断され、且つ両者間に現われる音形上の「ずれ」が、共時的・通時的観点に徴して、音韻体系の相違に起因すると解される例のみである(3)。その他、実際は相互に異なる語の音形を示しているにもかかわらず、単に字形の斉しさのみに拠って『博雅音』を『切韻』音に引き当てることによって生じる「ずれ」や、『博雅音』が『切韻』には採録されていない又音を示しているにもかかわらず、その音を『切韻』所載音に投影することによって生じる「ずれ」などは本稿で究明を試みる『博雅音』の体系上の問題とは直接関係しないので、その種の「ずれ」を示すと解される音注例は資料Ⅰ．音注総表に譲り、ここでは扱わない。

2. 2. 1　本項では声類の特徴的様相を探る。音注例の整理は、『切韻』の体系に関する従来の研究を参考にしつつ、またそこでは認められぬ＜軽唇音＞の系列を設けるなどの、資料整理に当たって必要と判断される補訂を加えて定めた声類の体系（cf.『唐代字音』pp. 51—54）を基準として行なう。

2. 2. 1. 1　　唇　音

（1）まず重軽の分化の様相を探る。

次表は重唇音・軽唇音の分化の状況を見るために、反切によって注された唇音字総て(4)について、その上字と帰字との関係について行なった調査の結果を数値によって示したものである。表中の軽唇音字（帰字・上字）とは、史的変遷の過程で軽唇音化を起こす音韻的条件を具えた文字、即ち、平声韻を以て代表させるならば、≪東三・乙（但し≪明≫母字を除く）鍾乙微虞乙廃文元陽乙尤乙（但し≪明≫母字を除く）凡≫ 韻所属唇音字のことである。表示に当たって、≪微≫母は多く特異な様相を示すので他の軽唇音声母と区別して算定し、また掲げる音注の実際例（帰字　上字・下字の順に示す）は反切上字と帰字との重軽が合わぬものに限り、他に

ついては資料Ⅰ．音注総表に譲り省略する。

〔上字〕 / 〔帰字〕	幫	滂	並	明	計(%)	非	敷	奉	計(%)	微(%)
重脣音	75	81	88	46	290 (99.7)	6 (B)	4 (C)	13 (D)	23 (28.0)	37 (E) (92.5)
軽脣音		1 (A)			1 (0.3)	20	15	24	59 (72.0)	3 (7.5)
計	75	82	88	46	291	26	19	37	82	40

（A）娩　匹萬

（B）屏 a) 福郢、彬　福巾、趼　方孟、眓　方寄、錍　方支、箯　方千。

a）『博雅音』に見える被注字は帡である。

（C）伾　芬悲、臆　孚二、摽　孚堯、憋　芳列。

（D）毗　符夷、埤　符彌、頻　符賓、愎　符逼、辟　符役、紕　符夷、舽　扶江、脺　扶江、榫　扶支、紕　扶規、臆　扶四、裨　浮夷、便　房連。

（E）眇 a) 亡八、厖　亡江、槾　亡丸、漫 b) 亡旦、鞔　亡干、眄　亡見、幎　亡狄、麋 c) 亡皮、癟　亡彼、侏　亡是、緡　亡巾、藐　亡角、魈 d) 亡限、蔆　亡咸、眽　亡革、眊　亡到・亡角、穩　亡再、懣　亡本、媢　亡篤、芼　亡報、嗼　亡各、粖　亡達、粖　亡結、菽 e) 亡老・亡豆、芇 f) 亡安・亡殄、耰　亡旦、糠　亡達、嗼　亡白、揗　無巾、錉 g) 無巾、縻　無悲、糜　無悲、拓　忘革。

a）『博雅音』に見える被注字は昒である。

b）『博雅音』に見える被注字は槾である。

c）『博雅音』は黐に作る。

d）『博雅音』は晩に作る。

e）『博雅音』に見える被注字は菽である。

f）『博雅音』に見える被注字は萳である。

g）『博雅音』は盷に作る。

以上によって、鼻音を除く三声母に重・軽の反切用字面に於ける区別の傾向を指摘できよう。書写上の伝統による羈絆などをも考慮に入れるならば、この区別の傾向は、鼻音以外の脣音に於ける重軽の別が音声的

にかなり明確であったことの反映と推考して大過ないと思われる。

（２）次に脣音声母の混同を示すと解される例を挙げる。以下、音注例は、被注字　『広韻』に見える反切、『博雅音』に見える反切・直音、の順に示す。尚、傍証例（cf.『唐代字音』p. 42、脚注６）と解される音注には末尾に〔傍〕と記し、また、検索の便宜を計り当該字の資料Ⅰ．音注総表に見える箇所（韻類・摂・注番号）を付記する。

○軽脣音声母≪非≫≪敷≫≪奉≫の混同

靡	甫微≪非≫	拂≪敷≫非	ⅢB・止・9
柫	分勿≪非≫	音拂≪敷≫	ⅢB・臻・3
傅	方遇≪非≫	音敷≪敷≫〔傍〕	ⅢB・遇・15
拊	芳武≪敷≫	方≪非≫宇〔傍〕	ⅢB・遇・13
……			
葍	方六≪非≫	音腹≪奉≫	ⅢB・通・3
……			
菲	敷尾≪敷≫	佛＊≪奉≫匪	ⅢB・止・10

＊佛（≪敷≫母字）の誤写か。今はテキストに見える字体に従う。

溫	孚梵≪敷≫	音凡≪奉≫	ⅢB・咸・8
妉	房乏≪奉≫	赴≪敷≫乏	ⅢB・咸・6
		芳≪敷≫乏	ⅢB・咸・7
柫	防無≪奉≫	音敷≪敷≫〔傍〕	ⅢB・遇・16

○全濁声母≪並≫と全清声母≪幫≫・次清声母≪滂≫の混同

鮅	蒲結≪並・入≫	匕≪幫≫節	Ⅳ・山・2
抜	蒲撥≪並・入≫	博≪幫≫末〔傍〕	Ⅰ・山・26
𩽾＊	方緬≪幫≫	婢≪並・上≫典	Ⅳ・山・7

＊『博雅音』に見える被注字は鱉である。

騑	彼則≪幫≫	歩≪並・去≫力	ⅢA・曽・3

樽	補各≪幫≫	步≪並・去≫各	Ⅰ・宕・2
粺	符支≪並・平≫	音卑≪幫≫〔傍〕	ⅢA・止・2
顯	必鄰≪幫≫	音頻≪並・平≫	ⅢA・臻・3

槌＊	房脂≪並・平≫	普≪滂≫奚	Ⅳ・蟹・3

＊『博雅音』に見える被注字は搥である。

畐＊	芳逼≪滂≫	皮≪並・平≫逼	ⅢA・曽・2

＊『博雅音』に見える被注字は愊である。

溢	普悶≪滂≫	蒲≪並・平≫悶〔傍〕	Ⅰ・臻・4
部	普后≪滂≫	步≪並・去≫古	Ⅰ・遇・4
駓	敷悲≪滂≫	步≪並・去≫悲〔傍〕	ⅢA・止・55

2. 2. 1. 2　舌音

以下に舌音声母の混同を示すと解される例を挙げる。

○全濁声母≪定≫と全清声母≪端≫・次清声母≪透≫の混同

稚	徒果≪定・上≫	丁≪端≫禾	Ⅰ・果・13
蹬	徒亘≪定・去≫	丁≪端≫鄧	Ⅰ・曽・5
鐓	徒對≪定・去≫	音敦≪端≫	Ⅰ・蟹・29
堪	特計≪定・去≫	音帝≪端≫	Ⅳ・蟹・6
椴	徒玩≪定・去≫	都≪端≫館〔傍〕	Ⅰ・山・32
恬	徒結≪定・入≫	多≪端≫結〔傍〕	Ⅳ・山・12
咚	徒冬≪定・平≫	音冬≪端≫	Ⅰ・通・18

汰	徒蓋≪定・去≫	音太≪透≫	Ⅰ・蟹・16
軟＊	徒蓋≪定・去≫	音太≪透≫	Ⅰ・蟹・15

＊『博雅音』に見える被注字は鈦である。

蜨＊	徒得≪定・入≫	他≪透≫則	Ⅰ・曽・6

＊『博雅音』は蛩に作る。

鉈	徒盍≪定・入≫	他≪透≫臘	Ⅰ・咸・22
蹋*	徒盍≪定・入≫	他≪透≫帀	Ⅰ・咸・2
	*『博雅音』は踏に作る。		
橢	他果≪透≫	大≪定・去≫果	Ⅰ・果・14
曇	他紺≪透≫	代≪定・去≫紺	Ⅰ・咸・3
曉	他代≪透≫	音逮≪定・去≫	Ⅰ・蟹・3
侹	他鼎≪透≫	達≪定・入≫鼎	Ⅳ・梗・6
		大≪定・去≫鼎	Ⅳ・梗・7

▽≪定≫≪透≫両母の別を示すと解される例も見える(5)：錟　音談≪定・平≫又音他≪透≫甘反（8・7・2）、棁　吐≪透≫活反又杜≪定・上≫活反（8・5・10）。

○全濁声母≪澄≫と全清声母≪知≫・次清声母≪徹≫の混同

緻	直利≪澄・去≫	音致≪知≫〔傍〕	ⅢA・止・64
窗	陟格≪知≫	丈≪澄・上≫革	Ⅱ・梗・34
跦	陟輸≪知≫	音廚≪澄・平≫	ⅢB・遇・21
……（省略）			
倀	褚羊≪徹≫	音長≪澄・平≫	ⅢB・宕・3
甀	直亮≪澄・去≫	音悵≪徹≫	ⅢB・宕・2
橕	丑庚≪徹≫	丈≪澄・上≫盲	Ⅱ・梗・8

○舌頭音声母と舌上音声母の混同

篤	都教≪端≫	珍≪知≫教	Ⅱ・效・3
酘*	丁呂≪端≫	陟≪知≫呂	ⅢB・遇・1
	*『博雅音』は酖に作る。		
訑*	丁呂≪端≫	竹≪知≫呂	ⅢB・遇・2
	*『博雅音』は佇に作る。		
扚	都歷≪端≫	竹≪知≫歷	Ⅳ・梗・10

齰	卓皆≪知≫	丁≪端≫皆	Ⅱ・蟹・6
掇	豬几≪知≫	丁≪端≫几	
窒	陟栗≪知≫	丁≪端≫一	ⅢA・臻・6
癆	竹例≪知≫	丁≪端≫世〔傍〕	
長	知丈≪知≫	丁≪端≫丈〔傍〕	

恫	他紅≪透≫	勑≪徹≫公	Ⅰ・通・9
黮	他感≪透≫	勑≪徹≫感	Ⅰ・咸・10
獺	他鎩≪透≫	勑≪徹≫轄	Ⅱ・山・3
僮	他達≪透≫	勑≪徹≫達〔傍〕	Ⅰ・山・21

湛	徒減≪定≫	丈≪澄≫減	Ⅱ・咸・2
		直≪澄≫減	Ⅱ・咸・3
朓	徒了≪定≫	音兆≪澄≫	ⅢA・效・7
謫	丈厄≪澄≫	徒≪定≫革	Ⅱ・梗・29
躇	宅加≪澄≫	徒≪定≫加	Ⅱ・假・2
霅	丈甲≪澄≫	徒≪定≫甲〔傍〕	Ⅱ・咸・16

嫄	奴困≪泥≫	女≪娘≫寸	Ⅰ・臻・7
淖	奴教≪泥≫	孃≪娘≫教	Ⅱ・效・5
		女≪娘≫孝	Ⅱ・效・9
橈	奴教≪泥≫	女≪娘≫孝	Ⅱ・效・7
赧	奴板≪泥≫	女≪娘≫板	Ⅱ・山・7

2. 2. 1. 3　歯音

以下に歯音声母の混同を示すと解される例を挙げる。

○全濁声母≪従≫と全清声母≪精≫・次清声母≪清≫の混同

趲	藏旱≪従・上≫	作≪精≫滿	Ⅰ・山・39

譖　慈演≪従・上≫　音翦≪精≫〔傍〕　ⅢA・山・12
駔　子朗≪精≫　在≪従・上≫朗　Ⅰ・宕・11
霽　子禮≪精≫　耤≪従・入≫禮　Ⅳ・蟹・16
憔＊昨焦≪従・平≫　子≪精≫笑　ⅢA・效・11
　＊『博雅音』に見える被注字は癄である。
簪＊子六≪精≫　才≪従・平≫六　ⅢB・通・9
　＊『博雅音』は籤に作る。

▽≪従≫≪精≫両母の別を示すと解される例も見える：截　昨≪従・入≫再反、祖≪精≫戴反（8・3・1）。

……

蟦　取私≪清≫　疾≪従・入≫資　ⅢA・止・71

○全濁声母≪従≫≪邪≫の混同
遰＊自秋≪従・平≫　徐≪邪・平≫留　ⅢB・流・13
　＊『博雅音』に見える被注字は酋である。
嶕　昨焦≪従・平≫　辭≪邪・平≫焦　ⅢA・效・15
酋　自秋≪従・平≫　似≪邪・上≫流　ⅢB・流・14
橧　疾陵≪従・平≫　似≪邪・上≫陵　ⅢA・曾・7
癠　慈演≪従・上≫　辞≪邪・平≫翦　ⅢA・山・14
穽　疾政≪従・去≫　辭≪邪・平≫政　ⅢA・梗・13
捽　慈邮≪従・入≫　旬≪邪・平≫律　ⅢA・臻・33
詐　昨誤≪従・去≫　似≪邪・上≫故　Ⅰ・遇・10
請＊疾政≪従・去≫　似≪邪・上≫政　ⅢA・梗・11
　＊『博雅音』に見える被注字は靚である。
耤　秦昔≪従・入≫　似≪邪・上≫亦　ⅢA・梗・12

▽≪従≫≪邪≫両母の別を示すと解される例も見える：摵　就≪従・去≫夙反又似≪邪・上≫育反（1・1・8）、匠　音泉≪従・平≫、正音旋≪邪・平≫

（7・4・8）。

○全濁声母≪崇≫と全清声母≪荘≫・次清声母≪初≫の混同

傷＊鋤祐≪崇・去≫	壮≪荘≫救	ⅢB・流・15
＊『博雅音』に見える被注字は嫋である。		
柤　側加≪荘≫	士≪崇・上≫加〔傍〕	Ⅱ・假・7
	士≪崇・上≫家〔傍〕	Ⅱ・假・8
稠　仕于≪崇・平≫	荘≪荘≫于	ⅢB・遇・23

勦　鉏交≪崇・平≫	楚≪初≫交	Ⅱ・效・11
魖　楚交≪初≫	音巢≪崇・平≫〔傍〕	Ⅱ・效・14
訬　楚交≪初≫	士≪崇・上≫交	Ⅱ・效・13

○全濁声母≪船≫≪常≫の混同

騬＊食陵≪船・平≫	酬≪常・平≫陵	ⅢA・曽・6
＊『博雅音』は驟に作る。		
塍　食陵≪船・平≫	視≪常・上≫陵	ⅢA・曽・9
杼＊神與≪船・上≫	常≪常・平≫與	ⅢB・遇・9
＊『博雅音』は柔に作る。		
貰　神夜≪船・去≫	常≪常・平≫夜	ⅢA・假・2
揲　食列≪船・入≫	臣≪常・平≫熱	ⅢA・山・20
抒　神與≪船・上≫	侍≪常・去≫與	ⅢB・遇・8
蛥　食列≪船・入≫	音折≪常・入≫	ⅢA・山・21

2.　2.　1.　3　　牙喉音

以下に牙喉音声母の混同を示すと解される例を挙げる。

○全濁声母≪羣≫と全清声母≪見≫・次清声母≪溪≫の混同

俇＊求往≪羣・上≫	歸≪見≫往	ⅢB・宕・20

＊『博雅音』は徃に作る。

醹	居聿≪見≫	巨≪羣・上≫出	ⅢA・臻・40
𡢁	居月≪見≫	巨≪羣・上≫月	ⅢB・山・12
禨	居依≪見≫	巨≪羣・上≫衣	ⅢB・止・1
蹇	居偃≪見≫	音蹇≪羣・上≫	ⅢB・山・1
蛩	渠容≪羣・平≫	音拱≪見≫〔傍〕	ⅢB・通・28
鱎	居夭≪見≫	奇≪羣・平≫兆	ⅢA・效・23
嘰	居依≪見≫	音祈≪羣・平≫	ⅢB・止・2

……

嘺	渠遥≪羣・平≫	去≪溪≫巻	ⅢA・山・62
		邱≪溪≫遥	ⅢA・效・21
倦＊	渠巻≪羣・去≫	去≪溪≫願	ⅢB・山・11

＊『博雅音』は券に作る.

○全濁声母≪匣≫と次清声母≪暁≫の混同

臏	胡典≪匣≫	呼≪暁≫典	Ⅳ・山・28
攩	胡廣≪匣≫	音幌≪暁≫	Ⅰ・宕・20
豰	呼木≪暁≫	乎≪匣≫谷	Ⅰ・通・16
誶＊	許更≪暁≫	乎≪匣≫孟	Ⅱ・梗・15

＊『博雅音』は誶に作る。

篙	許激≪暁≫	乎≪匣≫的	Ⅳ・梗・21

▽≪暁≫≪匣≫両母の別を示すと解される例も見える：抇　呼≪暁≫没反又乎≪匣≫没反（2・2・3）、詢　呼≪暁≫遘反、乎≪匣≫遘反(3・2・9)。

○次濁声母≪于≫≪羊≫の混同

盪	與章≪羊≫	又≪于≫章	ⅢB・宕・18

2.　2.　1.　5　以上声類について『博雅音』に見える混同例を類別

・提示したが、そこに反映する音韻的特徴を総括すると次の様である。尚、参考のために「文選」『玉篇』に反映する様相の概略(6)を付記する。

（1）重脣音と軽脣音との分化が鼻音を除く三声母に関してかなり明瞭に認められる。「文選」『玉篇』も同様である。

（2）一般に北方字音に於ける事象として説かれる全濁（有声音）声母の全清・次清化（無声無気音・無声有気音への変化）を示すと解される例が脣・舌・牙音の何れにも見える（但し、これまで一般に説かれるところに従えば、全濁≪平声≫と全清との混同、全濁≪仄声≫と次清との混同は例外となる）。この様相は「文選」には見えるが『玉篇』からは窺えない。

（3）舌頭音：舌上音の区別を疑わしめる舌音類隔切の例が見える。「文選」『玉篇』も同様である。

（4）南方字音の特徴として説かれる≪従≫≪邪≫両母、≪船≫≪常≫両母混同の例が見られる。因みに、この混同は六朝末の江南に於ける字音の特徴である旨の指摘が『顔氏家訓』「音辞篇」に見える。「文選」（≪従≫≪邪≫混同例のみ）『玉篇』も同様である（但し、「文選」『玉篇』に見える≪匣≫≪于≫両母の混同例は『博雅音』から得られない）。

（5）≪于≫≪羊≫両母の混同を示す例が得られる。個例なので詳細は不明であるが、或は南方字音の特徴の反映と解されようか。「文選」にその確実な例は見えないが、河野六郎「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」（上引論文）によれば『玉篇』に於ては≪匣≫≪于≫（同論文では≪羽≫）≪羊≫（同論文では≪喩≫）三母の別がないという。

2. 2. 2 本項では韻類の特徴的様相を探る。音注例の整理は、『切韻』の体系に関する従来の研究に拠って定めた韻類の群別（cf.『唐代字音』pp. 110–111）を基準として行なう。以下、韻の構成要素である介母（開合・直拗）、主母音・韻尾、声調（本稿では省略に従う）のそれぞれについて報告する。

2. 2. 2. 1 介 母

『切韻』の体系では介母として＜開合＞と＜直拗＞の二種が認められる。以下、この順に『博雅音』に於ける両要素の在り方を見る（本稿に於ける開合・直拗の義については『唐代字音』pp. 111−115 を参照）。

○開合の様相は次の如くである（詳細は資料Ⅰ. 音注総表、資料Ⅱ. 反切上・下字相関表を参照）。

（1）基本的には『切韻』に於けると同様の対立関係が明確に認められる。

（2）脣音字は『切韻』の合口韻、開口韻何れもの反切上・下字として用いられ、従って脣音字は開合の対立に関して neutral であったと認められる。

○直拗の様相は次の如くである（詳細は資料1. 音注総表、資料Ⅱ. 反切上・下字相関表を参照）。

（1）直拗の対立は『切韻』に於けると同様明確に認められる。『切韻』の体系に則して言えば、直音字は直音の反切下字によって、拗音字は拗音の反切下字によって注されている例が殆どである（例外については、本項6　Ⅰ／ⅢB韻類・本項9　ⅢA／Ⅳ韻類を参照）。

（2）拗音甲：乙の対立は、混同を見せる極く少数の事例を除き、基本的には明確であったと認められる。

（3）重紐の認められる諸韻（平声韻を以て代表させるならば≪支脂祭真仙宵侵塩≫韻）字について、それの採る反切上字との関係を見るに、上字として重紐の認められる韻の字を採る時は、少数の例外を除いて、何れもその類を同じくしている。従って、『博雅音』に於ける重紐韻の甲：乙の対立は帰字と上字との関係に於ても明確であると認められる。その様相を以下の表に示す。表示に当たっては重紐甲類字を甲、重紐乙類字を乙、重紐韻以外のⅢA韻類字及びⅢB韻類字を丙、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ韻類字をそれぞれⅠ・Ⅱ・Ⅳとして示す。なお、脣音「匹」字を甲より分けて別扱いとしたのは、切韻系韻書に於てそれが丙と性格を同じくしているため

である（cf. 周法高「三等韵重脣音反切上字研究」『史語研集刊』23下、1952、p. 385他）。

○脣音

帰字声調	帰字声母 ＼ 上字類別 ＼ 帰字類別	甲							乙						
		丙	甲	「匹」	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ	乙	丙	乙	「匹」	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	甲
平	幫								2	2		1			1(B)
	滂														
	並	3	1						1			1			
	明								5	2					
	小計	3	1						8	4		2			1
上	幫														
	滂			1					1						
	並											1			
	明								1						
	小計			1				1(A)	2			1			
去	幫				1				1	2					1(C)
	滂			1							1				
	並				1										
	明														
	小計			1	2			1	1	2	1	1			1
入	幫														
	滂				1										
	並				1	1			1						
	明								1						
	小計				2	1			2						
	計	3	1	2	4	1		1	13	6	1	4			2

（A）粃　彼比。
（B）儦　必嬌。
（C）毖　必寄。cf. 音注総表 ⅢA・止・5

○牙喉音

帰字声調	帰字声母＼帰字類別＼上字類別	甲 丙	甲「匹」	I	II	IV	乙	乙 丙	乙「匹」	I	II	IV	甲
平	見							2					
	溪							3	1				
	羣								1				
	疑												
	影							7	1				
	曉	3				2				1			
	匣												
	小計	3				2		12	3	1			
上	見							6		3			
	溪												
	羣	1						3	3				
	疑							5		1			
	影							4		1			
	曉							2		1			
	匣												
	小計	1						20	3	6			
去	見	4											
	溪							2					
	羣		1					2	2				
	疑							1					
	影								2				1(B)
	曉	1				1		3					
	匣												
	小計	5	1			1		8	4	1		1	
	見	1						2					
	溪	1						1					
	羣												

入	疑				1(A)	4	2	1	
	影								
	暁	2				3			
	匣								
	小計	4			1	10	2	1	
	計	13	1	3	1	50	12	9	1

（A）戲 **愁**一。cf. 音注総表 ⅢA・臻・20
（B）委 一僞。cf. 音注総表 ⅢA・止・47

2. 2. 2. 2 Ⅰ韻類

以下にⅠ韻類に含まれる諸韻間の通用を示すと解される例を挙げる。挙例の体裁は声類と同様である。

○≪東一・屋一≫≪冬・沃≫両韻の通用

孰 徒冬≪冬≫ 大鴻≪東≫ Ⅰ・通・4
沃 烏酷≪沃≫ 音屋≪屋≫ Ⅰ・通・17

○≪哈≫≪泰開≫両韻の通用

譪 於蓋≪泰開≫ 音曖≪哈≫ Ⅰ・蟹・14

○≪哈≫≪灰≫両韻の通用

磈 五灰≪灰≫ 牛哀≪哈≫ Ⅰ・蟹・11

▽≪哈≫≪灰≫両韻の別を示すと解される例も見える：抶 古礙≪哈・去≫、古對≪灰・去≫（3・2・6）。

○≪泰合≫≪灰≫両韻の通用

憞 徒對≪灰・去≫ 度會≪泰合≫ Ⅰ・蟹・21
頹 郎外≪泰合≫ 雷對≪灰・去≫〔傍〕 Ⅰ・蟹・32

○≪泰開≫≪灰≫両韻の通用

沛　博蓋≪泰開≫　　盃妹≪灰・去≫〔傍〕　Ⅰ・蟹・24

○≪模≫≪侯≫両韻の通用

郜　普后≪侯・上≫　歩古≪模・上≫　　Ⅰ・遇・4

○≪覃・合≫≪談・盍≫

籃　作含≪覃≫　　作甘≪談≫　　Ⅰ・咸・28
簪　作含≪覃≫　　載甘≪談≫　　Ⅰ・咸・27
諳　烏含≪覃≫　　烏甘≪談≫　　Ⅰ・咸・36
堪　苦感≪覃・上≫　苦敢≪談・上≫　Ⅰ・咸・31
憾　胡紺≪覃・去≫　乎淡≪談・去≫　Ⅰ・咸・34
鮯　徒合≪合≫　　大臘≪盍≫　　Ⅰ・咸・23
罈　徒紞≪談・上≫　大紺≪覃・去≫　Ⅰ・咸・5
喊　呼覧≪談・上≫　呼感≪覃・上≫〔傍〕　Ⅰ・咸・17
譀　下瞰≪談・去≫　乎闇≪覃・去≫　Ⅰ・咸・18
蹋＊徒盍≪盍≫　　他帀≪合≫　　Ⅰ・咸・2

＊『博雅音』に見える被注字は踏である。

鞜＊徒盍≪盍≫　　大合≪合≫　　Ⅰ・咸・6

＊『博雅音』は鞳に作る。

▽≪合≫≪盍≫両韻の別を示すと解される例も見える：傝　三盍≪盍≫、索合≪合≫（3・10・2）。

2. 2. 2. 3　Ⅱ韻類

以下にⅡ韻類に含まれる諸韻間の通用を示すと解される例を挙げる。

○≪佳≫≪皆≫両韻の通用

絓　苦緺≪佳合≫　　空淮≪皆合≫　　Ⅱ・蟹・23

口乖≪皆合≫〔傍〕　Ⅱ・蟹・25

孋　薄蟹≪佳開・上≫　步楷≪皆開・上≫　Ⅱ・蟹・5

衱　楚懈≪佳開・去≫　楚械≪皆開・去≫　Ⅱ・蟹・10

誡＊火懈≪佳開・去≫　呼介≪皆開・去≫　Ⅱ・蟹・18

＊『博雅音』は誡に作る。

覞　五駭≪皆開・上≫　五買≪佳開・上≫　Ⅱ・蟹・3

○≪皆≫≪夬≫両韻の通用

鼾＊火犗≪夬開≫　許戒≪皆開・去≫　Ⅱ・蟹・17

＊『博雅音』に見える被注字は鼾である。

薈　丑犗≪夬開≫　丑介≪皆開・去≫　Ⅱ・蟹・7

快　苦夬≪夬合≫　可怪≪皆合・去≫〔傍〕　Ⅱ・蟹・24

○≪佳≫≪麻≫両韻の通用

誽＊妳佳≪佳開≫　女家≪麻開≫　Ⅱ・假・4

＊『博雅音』は誣に作る。

哇　於佳≪佳開≫　於家≪麻開≫　Ⅱ・假・14

＊本例は或は『広韻』に見える又音、烏瓜切≪麻合≫に投影して開合混同の例とすべきか。

洼　於佳≪佳開≫　穵家≪麻開≫〔傍〕　Ⅱ・假・15

蠉　戶媧≪佳合≫　戶瓜≪麻合≫〔傍〕　Ⅱ・假・21

賣　莫懈≪佳開・去≫　麥嫁≪麻開・去≫　Ⅱ・假・1

瘥　楚懈≪佳開・去≫　楚嫁≪麻開・去≫　Ⅱ・假・6

○≪删・鎋≫≪山・黠≫両韻の通用

擐　古鎋≪鎋開≫　公八≪黠合≫　Ⅱ・山・18

刮　古頠≪鎋合≫　古滑≪黠合≫　Ⅱ・山・26

刷　數刮≪鎋合≫　所滑≪黠合≫　Ⅱ・山・25

彪＊方閑≪山開≫　迫姦≪删開≫　Ⅱ・山・1

＊『博雅音』は廉に作る。

鬳	恪八≪黠開≫	揩瞎≪鎋開≫	Ⅱ・山・6
婠	烏八≪黠合≫	一刮≪鎋合≫	Ⅱ・山・12

○≪庚二・陌二≫≪耕・麥≫両韻の通用

勑	甫盲≪庚開≫	布萌≪耕開≫	Ⅱ・梗・23
恲	撫庚≪庚開≫	普耕≪耕開≫〔傍〕	Ⅱ・梗・24
堇	武庚≪庚開≫	莫耕≪耕開≫	Ⅱ・梗・26
拓	莫白≪陌開≫	忘革≪麥開≫	Ⅱ・梗・28
怕	普伯≪陌開≫	片麥≪麥合≫	Ⅱ・梗・43
攲＊	普伯≪陌開≫	溥麥≪麥合≫	Ⅱ・梗・44

＊『博雅音』に見える被注字は拓である。

鬲	陟格≪陌開≫	竹革≪麥開≫	Ⅱ・梗・30
磔	陟格≪陌開≫	竹尺≪麥開≫	Ⅱ・梗・31
窫	陟格≪陌開≫	丈革≪麥開≫	Ⅱ・梗・34
貉	莫白≪陌開≫	音麥≪麥合≫〔傍〕	Ⅱ・梗・47
罃	烏莖≪耕開≫	烏行≪庚開≫	Ⅱ・梗・18
擘	博厄≪麥開≫	班格≪陌開≫	Ⅱ・梗・2
榔	呼麥≪麥合≫	呼虢≪陌合≫	Ⅱ・梗・19
掶	下革≪麥開≫	乎格≪陌開〔傍〕	Ⅱ・梗・16

▽≪庚二≫≪耕≫両韻の別を示すと解される例も見える：絣　百猛反≪庚・上≫、布耕反≪耕≫（2・4・10）。（或は平・上声の別を示す例か。）

○≪咸・洽≫≪銜・狎≫両韻の通用

醓	所斬≪咸・上≫	所艦≪銜・上≫	Ⅱ・咸・20
摻	所斬≪咸・上≫	所艦≪銜・上≫〔傍〕	Ⅱ・咸・19
扱	楚洽≪洽≫	初匣≪狎≫	Ⅱ・咸・17
陜	侯夾≪洽≫	音匣≪狎≫	Ⅱ・咸・23

夾　古洽≪洽≫　古匣≪狎≫〔傍〕　Ⅱ・咸・21
劖＊鋤銜≪銜≫　士咸≪咸≫　Ⅱ・咸・5
＊『博雅音』は劖に作る。
黯　於檻≪銜・上≫　烏減≪咸・上≫　Ⅱ・咸・14
檻　胡黯≪銜・上≫　乎減≪咸・上≫　Ⅱ・咸・13

2. 2. 2. 4　ⅢA韻類

以下にⅢA韻類に含まれる諸韻間の通用を示すと解される例を挙げる。

○≪支≫≪脂≫両韻の通用

紕　符支≪支開≫　符夷≪脂開≫　ⅢA・止・51
埤＊符支≪支開≫　浮夷≪脂開≫　ⅢA・止・52
＊『博雅音』に見える被注字は裨である。
鼙　符支≪支開≫　音毗≪脂開≫　ⅢA・止・54
麻　靡為≪支開≫　無悲≪脂開≫　ⅢA・止・59
糜　靡為≪支開≫　無悲≪脂開≫　ⅢA・止・60
醨＊所宜≪支開≫　所飢≪脂開≫　ⅢA・止・78
＊『博雅音』に見える被注字は麗である。
觝＊巨支≪支開≫　渠夷≪脂開≫　ⅢA・止・89
＊『博雅音』は氐雌に作る。
軹　巨支≪支開≫　渠夷≪脂開≫　ⅢA・止・90
祂　弋支≪支開≫　音夷≪脂開≫　ⅢA・止・83
訛　匹婢≪支開・上≫　匹夷≪脂開≫　ⅢA・止・49
抳　女氏≪支開・上≫　女几≪脂開・上≫　ⅢA・止・68
弛＊施是≪支開・上≫　失旨≪脂開・上≫　ⅢA・止・81
＊『博雅音』は弛に作る。
跂　居綺≪支開・上≫　車美≪脂開・上≫　ⅢA・止・87
帗　披義≪支開・去≫　匹媚≪脂開・去≫　ⅢA・止・50
寘　支義≪支開・去≫　音摯≪脂開・去≫　ⅢA・止・79

羸	力爲≪支合≫	力追≪脂合≫	ⅢA・止・101
規 *	居隋≪支合≫	倶遺≪脂合≫	ⅢA・止・106

＊『博雅音』に見える被注字は𩓐である。

委	於爲≪支合≫	於悲≪脂開≫〔傍〕	ⅢA・止・98
詭 *	過委≪支合・上≫	車美≪脂開・上≫	ⅢA・止・88

＊『博雅音』に見える被注字は垝である。

僞	危睡≪支合・去≫	魚軌≪脂合・上≫	ⅢA・止・107
		魚美≪脂開・去≫〔傍〕	ⅢA・止・92
甀	馳僞≪支合・去≫	直類≪脂合・去≫	ⅢA・止・103
萎 *	於僞≪支合・去≫	委媚≪脂開・去≫	ⅢA・止・99

＊『博雅音』に見える被注字は殑である。

鯬 *	力脂≪脂開≫	音離≪支開≫	ⅢA・止・9

＊『博雅音』に見える被注字は鱺である。

棃	力脂≪脂開≫	音離≪支開≫〔傍〕	ⅢA・止・10
墀 *	直尼≪脂開≫	除離≪支開≫	ⅢA・止・13

＊『博雅音』に見える被注字は坻である。

泌 *	兵媚≪脂開・去≫	必寄≪支開・去≫	ⅢA・止・5

＊『博雅音』に見える被注字は毖である。

庇	必至≪脂開・去≫	不異≪支開・去≫	ⅢA・止・1
覬 *	几利≪脂開・去≫	音寄≪支開・去≫	ⅢA・止・29

＊『博雅音』に見える被注字は騠である。

絼	羊至≪脂開・去≫	以豉≪支開・去≫	ⅢA・止・24
箠	之累≪脂合・上≫	拙𦍌≪支合・上≫	ⅢA・止・42
尯	丘愧≪脂合・去≫	去僞≪支合・去≫	ⅢA・止・45

○≪支≫≪之≫両韻の通用

𥄎	式支≪支開≫	失之≪之≫	ⅢA・止・124
堤	是支≪支開≫	音時≪之≫	ⅢA・止・128
𧧑	并弭≪支開・上≫	必耳≪之・上≫	ⅢA・止・108

庨	尺氏≪支開・上≫	赤以≪之・上≫	ⅢA・止・121
弛＊	施是≪支開・上≫	失以≪之・上≫	ⅢA・止・127

＊『博雅音』は弛に作る。

施	施智≪支開・去≫	失異≪之・去≫〔傍〕	ⅢA・止・126
𢷎＊	里之≪之≫	力移≪支開≫	ⅢA・止・8

＊『博雅音』に見える被注字は釐である。

甾	側持≪之≫	㠯儀≪支開≫	ⅢA・止・17

▽≪支≫≪之≫両韻の別を示すと解される例も見える：𢷎　士宜≪支開≫、士疑≪之≫（2・7・1）。

○≪脂≫≪之≫両韻の通用

仳	房脂≪脂開≫	鼻之≪之≫	ⅢA・止・110
毘＊	房脂≪脂開≫	婢之≪之≫	ⅢA・止・111

＊『博雅音』に見える被注字は笓である。

穧	疾資≪脂開≫	在茲≪之≫	ⅢA・止・117
餈＊	疾資≪脂開≫	才辭≪之≫	ⅢA・止・118

＊『博雅音』は饙に作る。

鴟	處脂≪脂開≫	齒之≪之≫	ⅢA・止・122
胵	處脂≪脂開≫	齒之≪之≫	ⅢA・止・123
砥	職雉≪脂開・上≫	音止≪之・上≫＊	ⅢA・止・119

＊本例は或は『広韻』に見える又音、諸氏切に投影して≪支開・上≫≪之・上≫両韻通用の例とすべきか。

痺	必至≪脂開・去≫	必異≪之・去≫	ⅢA・止・109
尿	丑利≪脂開・去≫	勑吏≪之・去≫	ⅢA・止・114
緻	直利≪脂開・去≫	直異≪之・去≫〔傍〕	ⅢA・止・115
膩＊	女利≪脂開・去≫	女吏≪之・去≫	ⅢA・止・116

＊『博雅音』に見える被注字は貳である。

𢷎	里之≪之≫	力咨≪脂開≫	ⅢA・止・62

鼒	子之≪之≫	音資≪脂開≫	ⅢA・止・70
飋	楚持≪之≫	楚飢≪脂開≫	ⅢA・止・77
頤	與之≪之≫	音夷≪脂開≫	ⅢA・止・85
菑	側持≪之≫	阻師≪脂開≫〔傍〕	ⅢA・止・75
弤	陟吏≪之・去≫	音致≪脂開・去≫	ⅢA・止・63
毦	仍吏≪之・去≫	音二≪脂開・去≫	ⅢA・止・82
眙	丑吏≪之・去≫	恥利≪脂開・去≫〔傍〕	ⅢA・止・67

○≪脂≫≪祭≫両韻の通用

淠	匹備≪脂開・去≫	匹制≪祭開≫〔傍〕*	ⅢA・蟹・1

＊本例は或は『広韻』に見える又音、匹詣切に投影して≪斉開・去≫≪祭開≫両韻通用の傍証例とすべきか。

婺	陟隹≪脂合≫	陟衛≪祭合≫〔傍〕	ⅢA・蟹・11
帥	所類≪脂合・去≫	升芮≪祭合≫〔傍〕	ⅢA・蟹・14
剝	牛例≪祭開≫	牛二≪脂開≫	ⅢA・止・91

○≪庚三・陌三≫≪清・昔≫両韻の通用

偵	丑貞≪清開≫	勑驚≪庚開≫	ⅢA・梗・22
經	丑貞≪清開≫	恥京≪庚開≫	ⅢA・梗・26
檉	丑貞≪清開≫	恥京≪庚開≫	ⅢA・梗・24
竀	丑貞≪清開≫	恥敬≪庚開・去≫	ⅢA・梗・23
䛐*	丑鄭≪清開・去≫	恥敬≪庚開・去≫	ⅢA・梗・27

＊『博雅音』は䛐に作る。

擿	直炙≪昔開≫	池戟≪陌開≫	ⅢA・梗・28
		雉戟≪陌開≫	ⅢA・梗・31
蹢	直炙≪昔開≫	馳戟≪陌開≫	ⅢA・梗・29
躑*	直炙≪昔開≫	直戟≪陌開≫	ⅢA・梗・30

＊『博雅音』に見える被注字は蹢である。

2. 2. 2. 5 ⅢB韻類

以下にⅢB韻類に含まれる諸韻間の通用を示すと解される例を挙げる。

○≪屋三≫≪燭≫両韻の通用

輻 房六≪屋≫ 扶欲≪燭≫ ⅢB・通・17

○≪虞≫≪尤≫両韻の通用

鰒 芳無≪虞≫ 副周≪尤≫* ⅢB・流・2

*本例は或は『広韻』に見える又音、縛謀切に投影して≪奉≫≪敷≫両声母混同の例とすべきか。

蝜 武夫≪虞≫ 音牟≪尤≫〔傍〕 ⅢB・流・4

殕 芳武≪虞・上≫ 敷九≪尤・上≫* ⅢB・流・3

*本例は或は『広韻』に見える又音、方久切に投影して≪非≫≪敷≫両声母混同の例とすべきか。

罘* 縛謀≪尤≫ 肥無≪虞≫ ⅢB・遇・18

*『博雅音』は罟に作る。

2. 2. 2. 6 Ⅰ・ⅢB韻類

以下にⅠ韻類とⅢB韻類に含まれる同摂所属諸韻間の通用を示すと解される例を挙げる。

○≪東一・屋一≫≪東三・屋三≫両韻の通用

緟 莫卜≪屋一≫ 音目≪屋三≫ ⅢB・通・4

寫 莫鳳≪東三・去≫ 莫洞≪東一・去≫ Ⅰ・通・3

○≪東一・屋一≫≪鍾・燭≫両韻の通用

蠬 盧紅≪東≫ 音龍≪鍾≫ ⅢB・通・19

棟 千木≪屋≫ 且足≪燭≫〔傍〕 ⅢB・通・21

籙 力玉≪燭≫ 音鹿≪屋≫ Ⅰ・通・8

▽≪屋－≫≪燭≫両韻の別を示すと解される例も見える：逐　音鹿≪屋－≫、音録≪燭≫二音（6・4・10）。

○≪魂・没≫≪文・物≫両韻の通用

僨	蒲本≪魂・上≫	扶粉≪文・上≫	ⅢB・臻・5
窟	古忽≪没≫	居勿≪物≫	ⅢB・臻・11
蝹	於云≪文≫	音溫≪魂≫	Ⅰ・臻・14

○≪唐・鐸≫≪陽・薬≫

央＊	於兩≪陽開・上≫	烏郎≪唐開≫	Ⅰ・宕・17
	＊『博雅音』に見える被注字は鞅である。		
軮	魚向≪陽開・去≫	五浪≪唐開・去≫	Ⅰ・宕・15
趯	七雀≪薬開≫	音錯≪鐸開≫	Ⅰ・宕・10
嚼＊	在爵≪薬開≫	慈樂≪鐸開≫〔傍〕	Ⅰ・宕・12
	＊『博雅音』は噣に作る。		

▽≪唐≫≪陽≫両韻の別を示すと解される例も見える：筐　音良≪陽開≫、郎≪唐開≫二音（7・8・3）。

○≪侯≫≪尤≫両韻の通用

諉	蘇后≪侯・上≫	三酉≪尤・上≫	ⅢB・流・12
貿	莫候≪侯・去≫	莫救≪尤・去≫	ⅢB・流・5
鬱	莫浮≪尤≫	莫候≪侯・去≫	Ⅰ・流・3
陬	側鳩≪尤≫	側侯≪侯≫	Ⅰ・流・12
楱	楚鳩≪尤≫	又溝≪侯≫〔傍〕	Ⅰ・流・14
鰓	莫浮≪尤≫	音茂≪侯・去≫〔傍〕	Ⅰ・流・4
掫	側九≪尤・上≫	壯后≪侯・上≫〔傍〕	Ⅰ・流・13

2. 2. 2. 7　ⅢA・ⅢB韻類

以下にⅢA韻類とⅢB韻類に含まれる同摂所属諸韻間の通用を示すと解される例を挙げる。

○≪脂≫≪微≫両韻の通用

剞＊魚器≪脂開・去≫　魚既≪微開・去≫　ⅢB・止・4

＊『博雅音』に見える被注字は剞である。

剭　乙冀≪脂開・去≫　於既≪微開・去≫　ⅢB・止・7

唏　虚豈≪微開・上≫　虚几≪脂開・上≫〔傍〕ⅢA・止・93

許几≪脂開・去≫〔傍〕ⅢA・止・95

許既≪微開・去≫　虚冀≪脂開・去≫〔傍〕ⅢA・止・94

許冀≪脂開・去≫〔傍〕ⅢA・止・96

勃　扶涕≪微合・去≫　歩器≪脂開・去≫〔傍〕ⅢA・止・57

○≪之≫≪微≫両韻の通用

熹＊許其≪之≫　音晞≪微開≫　ⅢB・止・5

＊『博雅音』は熺に作る。

欷　許既≪微開・去≫　許記≪之・去≫　ⅢA・止・132

○≪祭乙≫≪廃≫両韻の通用

矺　丘吠≪祭合≫　苦穢≪廃≫　ⅢB・蟹・1

矮　呼吠≪祭合≫　音喙≪廃≫　ⅢB・蟹・2

○≪真(臻)乙・質(櫛)乙≫≪欣・迄≫両韻の通用

扤　所臻≪臻≫　所斤≪欣≫　ⅢB・臻・17

矜　巨巾≪真開≫　巨斤≪欣≫　ⅢB・臻・19

闇　語巾≪真開≫　魚斤≪欣≫　ⅢB・臻・20

訢　語巾≪真開≫　魚斤≪欣≫　ⅢB・臻・22

慭＊魚覲≪真開・去≫　魚靳≪欣・去≫　ⅢB・臻・21

＊『博雅音』は慇に作る。

砐　普巾≪真合≫　普斤≪欣≫　ⅢB・臻・15
气　去訖≪迄≫　去乙≪質開≫　ⅢA・臻・18
疔＊魚迄≪迄≫　魚乙≪質開≫　ⅢA・臻・21
＊『博雅音』は疔に作る。
仡　魚迄≪迄≫　魚乙≪質開≫　ⅢA・臻・21、22

○≪真合(諄)≫≪文≫両韻の通用
錞　常倫≪諄≫　是聞≪文≫〔傍〕　ⅢB・臻・9

○≪仙乙・薛乙≫≪元・月≫両韻の通用
舛　昌兗≪仙合・上≫　侈遠≪元合・上≫　ⅢB・山・8
卷＊渠卷≪仙合・去≫　去願≪元合・去≫　ⅢB・山・11
＊『博雅音』に見える被注字は券である。
綴　陟劣≪薛合≫　陟月≪月合≫　ⅢB・山・6
拙　職悦≪薛合≫　織厥≪月合≫　ⅢB・山・7

○≪幽≫≪尤≫両韻の通用
彪　甫烋≪幽≫　必鄒≪尤≫　ⅢB・流・1
呦　於糾≪幽・上≫　於柳≪尤・上≫　ⅢB・流・22
鼬　七由≪尤≫　千幽≪幽≫　ⅢA・流・1

▽≪幽≫≪尤≫両韻の別を示すと解される例も見える：黝　於糾反≪幽・上≫、於久反≪尤・上≫（7・2・6）。黝　於糾反≪幽・上≫、於柳反≪尤・上≫（8・8・9）。

○≪塩乙・葉乙≫≪厳(凡)・業(乏)≫両韻の通用
噞　魚檢≪塩・上≫　音儼≪厳・上≫　ⅢB・咸・2
魚窆≪塩・去≫　魚淹≪凡・去≫　ⅢB・咸・9

2. 2. 2. 8　　ⅢA・Ⅳ韻類

以下にⅢA韻類とⅣ韻類に含まれる諸韻間の通用を示すと解される例を挙げる。

○≪支≫≪斉≫両韻の通用

遞　徒禮≪斉開・上≫　狄邐≪支開・上≫　　ⅢA・止・7

▽≪支≫≪斉≫両韻の別を示すと解される例も見える：訾　音紫≪支開・上≫又子弟反≪斉開・上≫（5・6・4）。

○≪脂≫≪斉≫両韻の通用

棰＊房脂≪脂開≫　普奚≪斉開≫　　Ⅳ・蟹・3

＊『博雅音』に見える被注字は捶である。

甀　部迷≪斉開≫　歩美≪脂開・上≫　　ⅢA・止・56

▽≪脂≫≪斉≫両韻の別を示すと解される例も見える：膂　力咨反≪脂開≫又音犁≪斉開≫（5・6・4）。

○≪祭甲≫≪斉≫両韻の通用

拻　餘制≪祭開≫　夷細≪斉開・去≫　　Ⅳ・蟹・17

鋭　以芮≪祭合≫　役桂≪斉合・去≫　　Ⅳ・蟹・20

瞟　七計≪斉開・去≫　七祭≪祭開≫　　ⅢA・蟹・4

瞟　七計≪斉開・去≫　七祭≪祭開≫　　ⅢA・蟹・5

○≪仙甲・薛甲≫≪先・屑≫両韻の通用

篇＊卑連≪仙開≫　方千≪先開≫　　Ⅳ・山・1

房連≪仙開≫　婢年≪先開≫　　Ⅳ・山・5

＊『博雅音』は篇に作る。

辯　方緬≪仙開・上≫　婢典≪先開・上≫　　Ⅳ・山・7

＊『博雅音』に見える被注字は慧である。

踐＊慈演≪仙開・上≫　才殄≪先開・上≫　Ⅳ・山・19

＊『博雅音』に見える被注字は跧である。

籩　息淺≪仙開・上≫　先典≪先開・上≫　Ⅳ・山・20

簡　去演≪仙開・上≫　苦典≪先開・上≫　Ⅳ・山・27

揳　去演≪仙開・上≫　邱殄≪先開・上≫　Ⅳ・山・26

鼈＊并列≪薛開≫　匹結≪屑開≫〔傍〕　Ⅳ・山・4

＊『博雅音』は鱉に作る。

鱉　姊列≪薛開≫　音節≪屑開≫〔傍〕　Ⅳ・山・15

釨＊居列≪薛開≫　雞節≪屑開≫　Ⅳ・山・22

＊『博雅音』に見える被注字は孑である。

嬽　於緣≪仙合≫　音淵≪先合≫　Ⅳ・山・40

埒　力輟≪薛合≫　力閼≪屑合≫　Ⅳ・山・33

牖　布玄≪先開≫　音鞭≪仙開≫　ⅢA・山・2

跧　乃殄≪先開・上≫　乃展≪仙開・上≫＊　ⅢA・山・7

＊展は乙類字で本例は例外となる。

麪　莫甸≪先開・去≫　音面≪仙開・去≫　ⅢA・山・6

鼬＊五結≪屑開≫　魚列≪薛開≫　ⅢA・山・28

＊『博雅音』は鱖に作る。

臬　五結≪屑開≫　魚列≪薛開≫〔傍〕　ⅢA・山・29

鼸　普蔑≪屑開≫　篇悅≪薛合≫〔傍〕　ⅢA・山・37

懁＊古縣≪先合・去≫　俱面≪仙開・去≫　ⅢA・山・24

＊『博雅音』に見える被注字は獧である。

弮　古縣≪先合・去≫　音絹≪仙合・去≫　ⅢA・山・58

獧　古縣≪先合・去≫　音絹≪仙合・去≫　ⅢA・山・59

○≪宵甲≫≪蕭≫両韻の通用

摽＊撫招≪宵≫　孚堯≪蕭≫　Ⅳ・效・1

＊『博雅音』は摽に作る。

肭	撫招≪宵≫	匹聊≪蕭≫	Ⅳ・效・2
杓	撫招≪宵≫	片幺≪蕭≫	Ⅳ・效・3
剽	昨焦≪宵≫	才彫≪蕭≫	Ⅳ・效・13
		在堯≪蕭≫	Ⅳ・效・14
嘌	於霄≪宵≫	烏皎≪蕭≫	Ⅳ・效・19
嫽	力小≪宵・上≫	音了≪蕭・上≫	Ⅳ・效・11
鮡	於堯≪蕭≫	音要≪宵≫	ⅢA・效・24
挑	徒了≪蕭・上≫	音兆≪宵・上≫	ⅢA・效・7
剽	子了≪蕭・上≫	子紹≪宵≫	ⅢA・效・8

○≪清・昔≫≪青・錫≫両韻の通用

睛	七静≪清開・上≫	七挺≪青開・上≫	Ⅳ・梗・11
凊＊	七政≪清開・去≫	錯定≪青開・去≫	Ⅳ・梗・12

＊『博雅音』に見える被注字は瀞である。

磧	七迹≪昔開≫	七的≪錫開≫	Ⅳ・梗・13
析	先擊≪錫開≫	三亦≪昔開≫	ⅢA・梗・9

○≪塩甲・葉甲≫≪添・帖≫両韻の通用

黶	於琰≪塩・上≫	烏點≪添・上≫	Ⅳ・咸・5
靨	於葉≪葉≫	烏頰≪帖≫〔傍〕	Ⅳ・咸・6
黚	他兼≪添≫	他廉≪塩≫	ⅢA・咸・2
馦	許兼≪添≫	呼廉≪塩≫	ⅢA・咸・19
濂	勒兼≪添≫	音廉≪塩≫〔傍〕	ⅢA・咸・7
鰎	力忝≪添・上≫	力占≪塩≫	ⅢA・咸・5
曇	徒協≪怗≫	徒葉≪葉≫	ⅢA・咸・4
曄	呼牒≪怗≫	虚葉≪葉≫	ⅢA・咸・20

▽≪塩≫≪添≫両韻の別を示すと解される例も見える：嫿　烏縑≪添≫、烏檢≪塩・上≫（1・6・1）。（或は平・上声の別を示す例か。）

2. 2. 2. 9 以上韻類について『博雅音』に見える通用例を類別・提示したが、そこに反映する音韻的特徴を総括すると次の様である。尚、声類に於けると同様、参考のために「文選」『玉篇』に反映する様相の概略を付記する。

（1）＜開合＞及び＜直拗＞の対立（後者に関しては更に拗音甲：乙の対立）は明確であったと推測される。「文選」『玉篇』も同様である。

（2）Ⅰ韻類に含まれる諸韻の内、所謂＜一等重韻＞、即ち、i≪東・屋≫≪冬・沃≫、ii≪咍≫≪泰開≫、iii≪泰合≫≪灰≫の通用、及び、iv≪咍≫≪灰≫、≪模≫≪侯≫通用の様相が見える。「文選」から得られる通用例は上掲中、iii（5例）、iv（2例）である。『玉篇』では何れも分かれて混じない。因みに、iの通用は六朝末の河北に於ける字音の特徴である旨の指摘が『顔氏家訓』「音辞篇」に見える。

（3）Ⅱ韻類に含まれる諸韻の内、所謂＜二等重韻＞、即ち、i≪佳≫≪皆≫、ii≪皆≫≪夬≫、iii≪删・鎋≫≪山・黠≫、iv≪庚・陌≫≪耕・麥≫、v≪咸・洽≫≪銜・狎≫の通用、及び、vi≪佳≫≪麻≫通用の様相が見える。「文選」から得られる通用例は上掲中、ii（3例）、vi（1例）である。『玉篇』では何れも分かれて混じない。因みに、v（但し入声韻）の通用は六朝末の河北に於ける字音の特徴である旨の指摘が『顔氏家訓』「音辞篇」に見える。

（4）ⅢA韻類に含まれる諸韻の内、i≪脂≫≪祭≫、ii≪庚・陌≫≪清・昔≫通用の様相が見える。「文選」から得られる通用例は上掲中、i（1例）、ii（1例。但し入声韻）である。『玉篇』ではiiに一部混乱が見られるが他は分かれて混じない。

（5）ⅢB韻類に含まれる諸韻の内、i≪東・屋≫≪鍾・燭≫、ii≪尤≫≪虞≫通用の様相が見えるが、『顔氏家訓』「音辞篇」で六朝末の河北に於ける字音の特徴として指摘される≪魚≫≪虞≫両韻の通用例は得られない。「文選」『玉篇』では何れも分かれて混じない。

（6）Ⅰ・ⅢB韻類に含まれる諸韻の内、同摂所属諸韻間、即ち、i≪東一・屋一≫≪東三・屋三≫、ii≪東一・屋三≫≪鍾・燭≫、iii≪魂・没≫

≪文・物≫、iv≪唐・鐸≫≪陽・薬≫、v≪侯≫≪尤≫通用の様相が見える。「文選」から得られる通用例は上掲中、ii（1例。但し入声韻）、iv（2例。但し入声韻）である。『玉篇』ではi（但し脣音声母）、v（但し脣音声母）に混同が見られるが他は分かれて混じない。

（7）ⅢA・ⅢB韻類に含まれる諸韻の内、止摂所属諸韻間、即ち、i≪支≫≪脂≫、ii≪支≫≪之≫、iii≪脂≫≪之≫、iv≪脂≫≪微≫、v≪之≫≪微≫通用の様相が見える。「文選」から得られる通用例は上掲中、i（10例）、ii（1例（?））、iii（6例）、iv（4例）、v（2例）である。『玉篇』ではiiiに混同が見られるが他は分かれて混じない。因みに、iの通用は六朝末の河北に於ける字音の特徴である旨の指摘が『顔氏家訓』「音辞篇」に見える。

（8）ⅢB韻類に含まれる諸韻の内、所謂＜三等専属韻＞と、その韻摂を同じくするⅢA韻類所属乙類韻との間、即ち、i≪祭乙≫≪廃≫、ii≪真（臻）乙・質（櫛）乙≫≪欣・迄≫、iii≪仙乙・薛≫≪元・月≫、iv≪塩乙・葉≫≪厳（凡）・業（乏）≫の通用、及び、v≪真合≫≪文≫、vi≪幽≫≪尤≫通用の様相が見える。「文選」から得られる通用例は上掲中、ii（2例）、iii（3例）、iv（4例）、vi（4例）である。『玉篇』ではii、iv（但し入声韻を除く）、vi（但し平声韻）に混同が見られるが他は分かれて混じない。

（9）Ⅳ韻類に含まれる諸韻と、その韻摂を同じくするⅢA韻類所属甲類韻との間、即ち、i≪祭甲≫≪斉≫、ii≪仙甲・薛≫≪先・屑≫、iii≪宵甲≫≪蕭≫、iv≪清・昔≫≪青・錫≫、v≪塩甲・葉甲≫≪添・帖≫の通用、及び、ⅢA韻類止摂所属韻とⅣ韻類蟹摂所属韻との間、即ち、vi≪支≫≪斉≫、vii≪脂≫≪斉≫通用の様相が見える。「文選」から得られる通用例は上掲中、i（4例）、ii（7例）、iii（10例）、iv（3例）、v（3例）、vi（2例）、vii（2例）である。『玉篇』では何れも分かれて混じない。

3. 以上、隋代南方字音を反映し、而もその撰述年が『切韻』編纂時に極めて近いと推定される曹憲『博雅音』の声・韻類に見える混同・通用例の調査結果を示した。

この小論は既に述べた様に、専ら資料整理の結果報告を目的とするものであり、これに拠って音韻的特徴の一一について論ずることはしないが、報告のおわりに当たり、今後とも多様な視点から考究・検討さるべき事柄として二三を書き留めておく。

『博雅音』の字音資料価値として、本稿（上）に於て二点を挙げた。その第一は、本資料が隋代南方字音の一端を明らかにし、梁・唐代のそれとの比較対照によって南方字音と呼ばれるものの実相を更に明確化するのに有用と考えられる点であったが、上述の報告は、細部について考察さるべきことは尚残されるものの、それに対する一往の答となろう。そしてそれは亦、以下に些か記す様に、字音の本質やその演変の、また、残存する字音資料に音韻変化の痕跡を求め、それに拠りつつ変遷過程の構築を図ろうとする中国語音韻史の、それぞれの考究に与って参考とさるべき資料の一つになると思われる。

『博雅音』はその推定撰述年により明らかな如く、年代的には『玉篇』「文選」のほぼ中間に位置するが、上で総覧した様に、そこに反映する音韻的特徴は多く「文選」と斉しくし、『玉篇』とは極く一部の声・韻類に関して特徴を共にするのみで両者間には音韻上の大きな乖離が在ると言えよう。このことは、多分に保守的側面を内包し、それぞれが正音を示すべく撰せられたと推測される此等三種の資料を単一線上に点在せしめ、そこに時間軸に添った音韻・音声変化の跡を見るのは妥当ではないことを示唆すると私考する。若し敢えてそこに直線的な音韻・音声変化の跡を認めようとするならば、通算約120年の流れの中で、前半の僅か60年の間に極めて急激な変化が生じたと仮定せねばならず、それは、仮りに社会状勢の激動が有ったとしても、言語事象の実態を無視し、また中国に於ける学問継承の形態を蔑ろにした理解の仕方であろう。

筆者はこれまでに、字音資料というものはその性格上、撰述された時代・地方の音韻・音声状態を忠実且つ直接的に映すものでは必らずしもなく、注者の規範とする字音体系、基層を成す語音、継承する学統、時代的背景など様々な要因が様々な形でそれぞれの資料に反映されている

と考えられる旨を指摘したことがあるが（『唐代字音』pp. 9、103、226などを参照）、「文選」の撰者李善が貫籍を江都とし、曹憲の門生として江・淮に於て文選の学を修めた篤学の士であることを想起するならば、上で指摘した如き音韻的様相は理解し難いことではないと言えよう。即ち、極く概括的に述べるならば、『博雅音』が『玉篇』との間に乖離を示すのは恐らく撰者の規範とする字音体系の相違に起因すると推測され、一部声・韻類に関して『玉篇』とその特徴を斉しくするのは基層を成す語音（南方音）の反映であり、一方、「文選」とその特徴を多く共有するのは両者が規範・学統、そして語音をも同じくすることに因るためと捉えることによって先述の事象は矛盾なく説明し得ると思われるが如何であろうか。字音資料の取り扱いには、殊にそれを通時的研究に利用するに際しては、飽くまで慎重であるべきことを改めて痛感しつつ当面の解釈をここに示しておく。

さて、『博雅音』の価値の第二は、『切韻』編纂時に極めて近い時期に撰述された本資料の整理が、『切韻』の基礎音系に関する考究を進めるに当たって何等かの論拠を提供することへの期待が持たれる点であった。実際、その整理結果は、『切韻』とほぼ同様の体系的特徴を示す『玉篇』と異なって『切韻』の声・韻類間に少なからぬ混同の在ることを、そして此等の混同は亦唐代所撰音義書から窺える諸特徴（詳細は『唐代字音』を参照）とも多く斉しくすることを明らかにした。これは『切韻』の性格を論ずるに当たって視野に入れるべき一事項と考える。

筆者は唐代所撰音義資料の整理結果に基づいて『切韻』の基礎音系に関する考察を試み、顔師古『漢書音義』に拠って『切韻』長安音説に対する批判的意見を陳べ、また撰者不詳『敦煌出土礼記音残巻』に拠って『切韻』河南省（洛陽・鄴）音説に対する疑念を表し、その範囲内での私見を示したことが有るが（『唐代字音』pp. 344－350）、何れ、此の度の『博雅音』の整理によって明らかとなった諸事項や近時公表された先学の論考などをも踏まえつつ私見の再検討を行ない、改めて『切韻』の基礎音系について考え論ずる機会が得られればと願っている。今は以上を述べ

るに止どめ、餘は別稿に譲ることにする。

注

（1）　但し、資料の整理・検討に当たっては、資料に反映する音韻的特徴の、その現われ方の様々な可能性を考慮して、『切韻』の体系に対して必要な補訂を加えることは後述の通りである。

（2）　資料整理にこの方法を採る事由や具体的な手順・問題点などについては、拙著『唐代字音の研究』汲古書院　1981（以下、『唐代字音』と略称）pp. 39—46を参照されたい。

（3）　語義は『切韻』と同じくするものの、『博雅音』の音形が『切韻』とは隔絶した様相を示す例も見られる。これ等は、当時或る範囲内で通行していたもので『切韻』には採録されなかった語形を示している可能性もあり、それはまた資料として興味をそそられるものではあるが、『切韻』への投影に拠って音韻体系上の「ずれ」を探ることを目的とする本稿では考察の対象から外す。

（4）　但し、以下に掲げる脣音字は本表に算入しない。

○『切韻』と音形の「ずれ」を見せる例の内、それが『切韻』と懸隔した様相を示す以下の9例（cf. 注3）：祓　不勿、獖　扶粉、幭　無髪、朴　普木、𡘋　歩本、眑　亡内、陂　必何、袙　布末、忞　武粉。

○被注字が『広韻』に見えぬ以下の3例：悲　芳尾、拯　普必・白必。

○『広韻』に見えぬ又音を示すと解される以下の21例：嫳　普列、棚　負萌・負宏、焷　婢亦、酺　薄故、厖　亡項、絣　百猛、鷿　布獲、紕　布寐、攽　普眞、蹗　浦迷、朴　普卜、怦　普衡、寎　符命、爆　普角・歩角、坌　普寸、拊　方主、擎　芳舌、懇　莫佳、麿　無悲。

（5）　しかし乍ら、『博雅音』には以下に示す様な、『切韻』の体系に即して言えば同音と解される二音がそれぞれ別音を示す如く並記されている例も見られ、並記されている複数の音が常に別音を示すかについては疑点も残る。これ等の例の取扱いには注意する必要があると思われる。

匯　胡磊反、胡罪反（1・1・5）。両音とも≪匣≫≪灰・上≫韻

を示す。

妭　赴乏又乞乏、芳乏（1・6・10）。第1、3音は共に≪敷≫母≪乏≫韻を示す。

嬾　力但又音魯滿反（5・6・5）。前者は≪来≫母≪寒・上≫韻、後者は≪来≫母≪桓・上≫韻（但し脣音字）を示す。

付言すれば、同一資料から、一方に於て音韻上の混同・通用を示すと解される音注例が得られる反面、そこで示される両（或はそれ以上の）音が別音であることを示すと解される例が得られる点に対する一解釈については『唐代字音』pp. 108―109、p. 226を参照されたい。

（6）　『玉篇』に関しては、周祖謨「万象名義中之原本玉篇音系」（前引論文）、河野六郎「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」（前引論文）に、また「文選」に関しては『唐代字音』に拠る。